

こ の 夏

倉 橋 惣 三

大 阪

族のこの夏は、大阪市南區保育會主催の講習會に初まる。と例年通りに書き出すものゝ、此の講習會は、實は去年の「この夏」と、一年越しの繋がりになつてゐるものである。あの時は、文部省の學制改革案問題が突發して、八月三日からの此の講習會の約束を、その三日前になつて突然お斷りしなければならなくなつた。私としては萬已むを得なかつたことであり、幾度かの長距離電話で、會の方も充分事情を諒解しては下さつたといへ、此の上もない御迷惑をかけたものであつた。殊に、遠地の申込者諸君へは中止の通知を間にあはせることも出来難かつたために、三日の朝になつて、だしぬけのことわりをいふといふ苦い役廻りまで會に負はせたことを後から聞いて、私としても、まことに濟まない心もちにたえなかつた。今年、學校が休暇になると直ぐ、他の豫定を差繰つて、此の講習會へ馳けつけたのも、せめてもお埋めあはせの心からであり、同時に計畫せられた大阪市保育會の方の講習を、折角くながら辭したのも、南區保育會への私としての義理を立てた仕儀であつた。

そこで、此の講習の題目は、去年から持ち越しの「都市幼児教育の問題」といふので、七月十二日から三日間、市立高津小學校講堂で開かれた。南區主催であるが集めたのは殆んど全市の保姆諸君と他縣からの諸君で、此の問題が、如何

に深く考慮せられ、解決を求められてゐるかを察することが出来る。私の三日間の所論が、何んの新らしく力強い解決をも、此の重要問題に與へ得るものでないことは自ら知つてゐるけれども、理論よりも痛切な事實であるところの此の問題に對して、出来るだけの實感を以て迫つて見ることは怠らなかつた。

私は此の數年、大阪の幼稚園の實際を視る機會を逸してゐる。しかも、我國第一の最現代都市たる大阪の生活が、過重の文化を以て益々幼兒の生活を脅かしてゐるであらうことは想見するに難くない。此の時、幼兒の園の園丁は何を以て先づ當面の使命とすべきであらうか。幼稚園は家庭教育を補ふを以て目的とするが、都市殊に大都市幼兒の家庭生活に於て、最も缺けてゐるものは何であらうか。家庭はその社會環境の内にある家庭である。その家庭が、その社會環境の缺陷を缺陷とすることは免れない。茲に、幼稚園が普通の教育の使命の他に、その所在によつて特殊の緊急使命を自覺しなければならなくなる。しかも、その幼稚園も亦、その家庭と同じ社會環境の内に置かれてゐる。幼稚園とて土地を離れた天國でもなく、繪に描いた樂園でもない。幼兒の家庭生活が都市環境に即した缺陷をもち易いと同じに、都市幼稚園も亦、その同じ缺陷をもち易い環境條件にある。そこに、問題の難點があり、大都市幼稚園教育者の苦心と、その深刻な苦心から生れる、周密にして、また恐らくや大膽なる識見を要求せられる。教育は環境に即することを本質とするが、引きずりよせられるばかりが、即することの意味ではない。眞に教育的に即するためには、らしからざる處にらしきを具へてゆく深憂と、遠き慮りとを必要とする。——などと今更めかしく論じ立てるまでもなく、我國第一の現代大都市たる大阪が、我國第一の幼稚園都市たる所以が、市としての此の深憂と、遠き慮りとを實證してゐるものに他ならない。而して、多くの市民の中には、思慮の淺さと近さから、此上とも、上はべのらしさを、大阪の幼稚園に求めることがあるかも知れないが、必ずしもらしからざる處に、眞に大阪の幼稚園らしさを打ち建てゝゆかなければならないのが、大切な幼き苗木のために、都の内に小さき園を護る人々の、優しくも亦強い、骨の折れる、しかも骨折り甲斐の多い使命であるまいか。而して、之

れは皆。議論ではなく實行である。實行は組織や順序に拘はらず、一つでも早い實現に價值がある。この種の講習は、たと聽いて下さつた丈けでは嬉しくない。三日天下、三日講習、問題はその後につゞく實行力だ。

それは兎に角く、いつ來て見ても、大阪の保育界は私にとつて、常にインスピレーションだ。殊に、南區保育會會長南區長片山宇一氏も先年の講習以來の舊識であり、江田校長、石川校長、田中校長、原谷校長、大倉校長始め會幹部の諸君皆久しき舊知の間である。更めて此の三日間の高誼を深謝せざるを得ない。

濱寺、堺、岸和田、中大江

南區の講習を機會に、講習に先だつ十一日は濱寺と堺へ、講習中十二日は岸和田へ、十三日は中大江へ、それづゝよき時間をもつた。濱寺では吉田定次郎氏の双葉幼稚園を訪ねた。吉田氏は實業界の紳士であるが、特に幼兒教育に興味をもつて、此の幼稚園を開き、閑を偷んでは自らも幼兒の間に交り楽しんでゐる人である。殊に嘗て東京でお茶の水人形座の實演を觀て以來、幼兒のための人形芝居に多大の趣味を生じ、輕快なる小舞臺と、數十種の脚本に伴ふ器用なる舞臺セツトを工夫し、時に自ら人形をつかはれる程の、斯道(?)に於ける大フアンの一人である。舞臺背景は大道具と共に悉く吊り下げ式を用ゐ、至極簡便に要を得て居り、盛にレコートを併用せられるもの面白い。殊に示された新聞切抜によつて見ると、なか／＼盛に園外進出もせられるやうで、その景氣は、本家のお茶の水人形座の到底及ぶところでない。同氏に伴はれて濱寺公園の青松白砂道を一周、海水浴季に入らんとして採色準備中の海濱模様をも見、松深き某亭に畫餐を受け、堺市に赴いた。

堺市では市保育會主催の幼兒教育講演會が、午後一時から高等女學校の講堂に開かれた。堺市保育會は、市教育課長長井慶堯氏や吉田氏其の他諸君の熱心によつて、極く最近に結成せられたもので、本日は其の第一回の講演會といふことで

あつた。堺市の幼稚園は近く續々と其の設立を加へ、浸々として發展の途にある。その隆昌を祈つてやまない。

十二日は朝疾く、南海電鐵によつて、岸和田に赴いた。昨日も今日も御案内は高濱きみのさんであるが、今日の岸和田行は、昨年時から高濱さんとのプログラム中にあつたものである。但、私の岸和田訪問は去年やおとしからの計畫ではない。廻れば十五年前からのことである。當時、神戸幼稚園の望月園長の下に、寡黙溫和の若い保母さんが居た。意識型の反對の本然型で、本然のまゝの篤い信仰を基督教にに向けてゐる人であつた。望月園長からも厚い信頼を受けてゐられたが、その後身邊の事情で、神戸幼稚園を辭し、郷里岸和田に歸つて、舊城内の廣やかな自邸内の一部で幼児保育をはじめ、若い未亡人としての靜かな生活を、純真なる幼兒達の笑顔の裡にうち傾けることゝなつた。それが、今日訪問する佐藤満壽さんの鳩巢園であるが、創設後。まだ園名もなかつた間、子ども達に何と言はせませうかといふ相談を受けて、子ども達が實際そう言つて呼んでゐる通り、「おばさんの家」でいゝでせうと私が提案したことがある。そのなつかしい創設當時以來の希望でもあり約束でもあつた訪問が、今日やつと實現した譯なのである。鳩巢園の名は基督教の信仰から象徴されてゐるものと思ふが、實際、その名にふさわしい、どこまでもなごやかに、親しげな園である。私は、特に集つて來られた母の會の人々に、座談的なお話をした後、鳩の群れてゐる窓の下で紀念の撮影をした。私のやうな口數の多い生活には、斯ういふ靜かな教育生活がなつかしい。午後、南區講習。

此の夜、招かれて文樂を聴いた。私にとつて大阪と文樂とは必ず離れない。しかも、古軼の「陣屋」と、南部の「鳴戸」とが當夜の出來榮えは兎も角く、この夏の中で、いづれもう一度思ひ出すことにならうとは、その場になりてぞ、はじめてそうとは知つたりけるであつた。

十三日夜には、中大江婦人會のために家庭教育講演を行つた。此の婦人會は中大江小學校長田中熊市氏、同幼稚園主任米山えん氏等の盡力の下に、同區内の篤志なる婦人諸君によつて設けられたもので、非常に熱心有力なる婦人會である。

其の夕、會長關根夫人の心づくしによる毛馬關門畔鮎の茶屋の清興は、瀬波に映ふる夕日の色も美しく、都心を距る何里の思ひに、くつろぐことを得た。

十四日は講習終了。私の慰勞宴のために、特に趣向を選ばれた最尖端的餘興に、現代大阪の最後の幻想を残して、江田校長に送られ、築港から別府通ひの「みどり丸」に、久し振一人の自分を見出したのは夜の八時であつた。船内ではB Kからの歌澤が、さびた喉とねじめを聞かせて居た。

松山、道後、三津濱

瀬戸内海の夜の船は靜かな眠りを載せて滑り走る。伊豫の高濱へ着いたのは、翌朝九時四十分。早曉の驟雨に洗はれた四國の山が一段と冴えくしい。棧橋には保育會の船田操女史、田内芳逸氏其の他の出迎へを受け、直に松山を経て道後の宿に伴はれた。

道後は昔から天下に著聞する名温泉。旅館には一切内湯を設けず、町の中央に堂々たる御殿づくり三層樓の浴場があり、樓を振鷺閣と名づけ、靈の湯、神の湯、養生湯など、夫々の靈泉の儀容嚴かなるものがあつて、タルイ張り明るき摩登式でないところに、古き史感の豐なる一種の風格を具へてゐる。

松山市に於ける、愛媛縣保育會主催の講習會は十六日から二日間、濟美女學校の講堂に開かれた。愛媛縣は、先年宇和島の文化協會の講習に、同協會長二荒伯に招かれて來たことがあるが、保育會の諸君と相會して語るのは、今回が始めてである。しかも、四國の保育界に對しては、幾度か講習の機會をもつた香川縣（この夏も招かれたが、時間を繰り合はせ得なかつたのは遺憾であつた）以外、今年八月初めて訪ふべき徳島縣と共に、本縣の實狀を知りたいと豫てから希望にたえなかつたのである。蓋し、山陽道の保育界と共に、一衣帶水ともいふべき瀬戸内海を相抱いて、和煦暖々たる幼児教育の

一大樂園をつくることは、此の三縣が有する地理上の必然ともいふべく、又、風光明媚なる山陽道の南の濱から、同じく風光明媚なる四國の北の濱を望みては、年々歳々、私の想ひ禁じ難き願ひであつたのである。しかも、今年、親しく此地に來り、保育會諸君の充實せる熱心を見て、今更に心を強ふするものがある。幹部諸君の固き協力によつて、本縣保育界の愈々益々發展せんことは、私の期して疑はぬところである。

道後滞在の間、湯になじみて、折角く御案内を受けた松山城に登らなかつたことは、今にして思へば惜しいことをした。しかし、保育會の新名會長、船田女史、田内芳逸氏、佐伯芳子氏、宮本よしを氏、縣の汐見課長、荻野主事、松本熊衛氏等と共に、一夕の閑を與へられた松山市外の森林内の料亭の風趣は、忘れ難いものがある。其の翌日、船田女史の床軸に、「大いなる森にはいるやひやく」といふ虚子の句を見たが、恐らく此の森を吟じたものであらう。句といへば、松山が子規派の俳句の郷土たるは人の知るところ。子規、鳴雪、漱石その他の遺跡が少なくない。又、漱石の「坊ちゃん」の舞臺としても、探ぐれば興味深いものが澤山あるのであらうが、時がないので皆割愛した。但、時がないといひながら、今思ひ出しても實に楽しい休息の時をもつことは忘れなかつたのである。その一つは船田女史邸の晝寢である。女史は講習會場たる濟美女學校主として、その自宅を開放して、私達のために歡待をつくされたのであるが、私の知る婦人教育家の中で、女史ほど潤達に、私を、しかも新知の私を、心おきなからしめた人は尠ない。そこで、私もつい／＼、平生の地がねの無遠慮をさらけ出して、拜借の浴衣の袖口も寛々と、新らしい疊の上へごろりとばかり、作法もないが邪念もない晝寢姿を投げ出したものである。之れほど結構な夏の御馳走がまたとあらうか。ところで、此の潤達なる女主人は、二日御厄介になつた雅趣深い夏座敷に、軸も、床置も、活花も、一々ちゃんと取り替へて置くことを忘れない人である。私は實に胸の底から涼味を満喫した。その二日目の軸は、前日の古雅な小軸と違つて、表装も新らしい、故白川大將の遺墨の大軸であつた。因に、女史は其の白川大將の令妹なのである。

忘れられない休息のもう一つは、女子師範と松山の二つの高等女學校に奉職してゐる若い女先生、實は相變らずの昔の生徒達に誘はれて、月は東に、日は西にの夕方から、その月が、丁度満月のまんまるい光りを海上一ぱいに照りひろげた夜また、舟を三津濱の灣に漕ぎ出したことである。果ては、灣の向き側の砂磯に蘆を敷いて、さつき皆の釣つたのも交ぜて、（私の釣上げた大漁は三尾）船頭の手料理の夕食を共にし、月光を浴びて共に話しあつた。此の清遊には、三神女子師範學校長、新名同校主事も加はられたが、素より浴衣がけの非公式（？）で、そこには、昔の先生と昔の生徒との、打ちとけたくつろぎが、月下の海の波と共に、たゞ明るく、ひろくと漂ひ流れた。それは素より、明るい月と廣い海との舞臺効果に負ふところが多いのであつたらうが、若い人達も、自分で先生になつて見てから、昔の先生に一層打ち解けて呉れることが出来るやうになつたのもあらう。

八幡濱、川之石、今治

保育會講習の後、愛媛縣の依頼によつて、家庭教育講演を行ふために、縣社會課の松本熊衛氏同行、先づ八幡濱に赴いた。八幡濱は伊豫西端の港で、汽車がまだ通じてゐないため自働車によるの他ない。行程四時間餘、しかも其の間には、九十九峠、夜晝峠の二つの難所がある。斯うなると社會教育も容易のことでない。しかし、途中、大洲を過ぎつたことは（松山から約十三里）、地理に暗い私として、全く豫期しなかつた獲ものであつた。此地は、中江藤樹先生が十歳から二十七歳まで居られたところである。詳かに其の跡を訪ふ暇をもたなかつたが、この八月、滋賀縣保育會講習の時、是非訪ねたいと楽しんでゐる近江の小川村と、之れに、九月、島根縣保育會總會の時、汽車で通るに過ぎないが、伯耆の米子とを併せれば藤樹先生の全生涯を、地理的に悉くすることになる。殊に、孝子藤樹の少年時の逸話として傳へられてゐる、故郷の母のためにあかぎれの妙藥を購はれたといふ新谷の村が直ぐ近くであると、松本氏に教へられた時、車上ながら襟を

正すのおもひに禁じ難かつた。

翌十八日、八幡濱町公會堂に於て講演。その後を直ぐ川之石婦人會と母の會の諸君に伴はれて川之石町に赴いた。川之石は八幡濱から尙南下して、宇和島に近い。先年宇和島の講習に來た時も前町長宇都宮氏に招かれて講演を行つたが、この夏の機會に於て、特に再度の懇請を受け、喜んで時間を割いたのである。此の地の婦人會は、婦人會々長兵藤夫人（現町長兵藤傳兵衛氏夫人）副會長菅夫人、及び母の會々長岡田夫人等を中心として、町の助役宮野常治郎氏、川之石尋常小學校長山下長一郎氏、同町職業紹介所の政所爲藏氏その他の熱心なる盡力により、地方稀に見る程に充實し、活動してゐる。婦人修養の工夫を勵むと共に、託兒所をも開設してゐる。上記の諸氏皆先年來の舊知、その篤實なる厚誼には深く感銘させられざるを得なかつた。

十九日。ゆうべおそく川之石から乗つた夜の汽船が今治市に着いたのは正午前であつた。棧橋には市の社會課長高田猛氏、豫ての懇意である昭安幼稚園の田阪雪子氏其他が迎へられ、殊に田阪さんは其の幼稚園の幼兒達を連れて來てゐられた。この思ひがけない可愛いらしい歡迎團の前に、私がどんなニコニコ顔をして挨拶したことか。田阪さんの心いれを汲むと共に、朝々のお茶の水の幼稚園で、おぢちゃん〜といつて飛びついて來て呉れる、あの私の幼兒達のことを思ひ出されずには居られなかつた。

午後、公會堂に於て講演、尾道への聯連船の出る夕刻までの時間を、諸君と共に語りつゝ、伊豫の旅の名残りを惜しんだ。その時、引つゞいて同行せられた縣の松本氏のために、色紙をよごした一句がある。

伊豫五日 いそも いでゆも夏の月

さらば、四國の月よ。といふところだ。聊かセンチにね。

京 都

尾道から夜汽車で京都へ着いた。二十日の早朝である。迎へられて本願寺前の宿で小憩。直ぐ山科の本願寺別院に向つた。そこで開かれてゐる、本願寺の日曜學校講習會で、兒童宗教々育の講義をする爲である。

山科は、蓮如上人の貴い遺跡であり、入寂の地である。夏草のやゝ生ひ茂つてゐる別院の奥庭に面して、法流興起の當時を偲んだ。私など、素より何も分らない。しかも、「蓮如上人一代記開書」などによつてほんの僅にうかゞひ知る此の上人の化風にも、平易簡單の間に機法一體の極致心境を想見せしめて、敬慕の念深からざるを得ぬ。憾むらくは、時を急いで、此の聖地に、ゆつくりと物を想ふことが出来ないのみか、理にかこつた宗教々育論などを説きすてゝ去らなければならぬとは。——午後一時三十九分京都發の「燕」に馳けつけて、その夜の中には東京に歸らなければならないのである。

東 京

二十一日を準備に費して、二十二日から、お茶の水で、文部省主催の保育講習と、幼稚園協會主催の遊戲講習とが始まる。それに引つゞいて、二十八日から、帝國教育會主催の保育講習で講義、その間、午後には、昭和保姆養成所主催の講習と、佛教保育會主催の講習とで講義。それを三十日ですつて、三十一日、長崎縣へ向け出發。此の十日間は、この夏の中でも一番忙しい時であつた。しかも、今にして思へば、此の間が、今年の夏の一番暑い絶頂であつた。午後一時乗り込みの寢臺車を、早速晝寝々臺にして仕舞つたことも、人間に、あはれや疲勞といふものがあることを、一度でも御體驗になつてゐる紳士淑女には、必ずや御寛容を願ひ得ることであらう。

平 戸

一三六

八月一日。特急「富士」の連絡する長崎線急行を早岐で佐世保線へ乗り換へ、午後二時十七分佐世保着。平戸尋常高等小學校長北川庄太郎氏と、北松浦郡教育會の江頭伊三太氏とに迎へられ、自動車で一時間餘、田平^{たへ}日ノ浦から發動船で五分足らず、そこが平戸島の平戸港である。海添ひの宿の三階から眺めると、入江を隔てた對岸に架つてゐる古い石の橋の形の、何んと情趣掬すべきであらう。後で聞けば幸橋といひ、元祿十五年、當時には珍らしいオランダ架橋法によつて造られたものであると。平戸の古い異國情趣が先づ私の目をひきつけた。

其の夕、涼風の座には、北松浦郡教育會長堀口太一氏、高等女學校長梅田廣治氏、並びに北川、江頭兩氏、私のために、交々平戸の景勝と歴史とを語り、感興愈々盡くるところを知らない。平戸の名は小學校の歴史科以來耳に親しみが多いが、それにしても、此の史的内容の豊富極まりなき地を訪ふべく、私の豫備知識の何んと貧弱なことであらう。旅は、人を賢くして呉れる前に、いつでも、先づ其の無知を恥ぢしめる。少くも歴史を詳らにしないで古い土地に來るのは、老人が眼鏡を忘れて書庫に入るやうなものである。私は、諸君の歸られた後、早速宿に命じて、平戸に關する手頃なるガイドブックを求め、「平戸しるべ」を得た。小冊子であるが簡明にしてよく要を得てゐる。去年初めて長崎を訪ふに先だつては、豫め數卷の文献を通覽する用意をもつたが、今年は、平戸に對し其の用意の暇を有せなかつた譯である。

しかも、史跡史論以外、先づ私の興味を強く惹いたものがある。それは、さつき發動船で渡つて來た、あの狭い、しかし随分深さうに思へた瀬戸が、昔から鯨の遊び通る通路だと聞いた時である。玄海に接するところとして、當り前へのことだが、其の壯觀の想像が私の目を見張らせた。更に翌朝、目の前の小さい入江のやうな灣で、此春十五六間の小鯨が捕獲せられたといふ話を、さも、事もなげに宿の女中から聞いた時、私の感興は、たしかに鯨以下の大きさに擴がつた。私

は平生から陸で象、海で鯨を愛好するものであるが、その棲み家に来てゐるといふことは、何だか一種威壓味をもつ象鯨の感（こんな熟語は何處にもない）にたえざらしめた。私は、鯨の繪葉書を取寄せさせ、其話を書いて、東京の娘のところへ送つた。すると——その返事を見たのは、もう平戸を去つた後であつたが——娘からも、流石に驚きましたといふ手紙をよこした。鯨級の大きいものゝ前では、親父も、高等女學校の一年生も、感激に差が無いらしい。

歴史に従つて平戸を語ることは、私の力以上であるが、二日から三日間の講習會の間、御案内を受けて訪ねたところだけでも、到底一々に記しつけ難い内容がある。曰く、鄭成功の碑及遺跡、曰くイギリス松。イギリス商館跡。曰くオランダ商館跡。オランダ井戸。オランダ堀、日蘭親交記念碑。曰く河内浦。而して之れ等の古き平戸以外、沖禎介記念館と、肉弾三勇士の一人作江伊之助氏の家とは、明治と昭和との二つの國家的壯烈史實として、後世の平戸に残る大史跡たらずんばあらず。

沖禎介記念館は平戸西久保、沖莊藏氏の邸内にある。陳列館と、圖書館とがあり、共に觀覽者のために公開せられてゐる。陳列館には、志士沖禎介氏の遺品、及、氏の英靈を吊ふべく普く江湖より寄せられた多數の詩歌文章が嚴藏せられてゐる他に、各種の蒐集品が陳列せられてゐる。私は初め之れを以て沖家が禎介氏を記念するの心に出でたものとののみ思つてゐたのが、禎介氏令弟沖三雄氏の語られし談によつて、之れが元來禎介氏その人の遺志であつて、嚴父莊藏翁、その令息の志を遂げしめんが爲に設けられたものだといふことを知り、更に新たな感慨を深うした。その談によれば、禎介氏は青年時代東京にありし時、常に圖書館によつて、その自學自習の便宜を體驗せられ、業成るの日は、必ず郷里の子弟の爲に圖書館を開設せんことを企圖して居られたのであるそうである。しかも、彼の日露戰役に際し、身を國事に挺して、同志横川氏と共に、壯烈の死を遂げらるゝに及び、嚴父莊藏翁によつて、その遺圖の實現せられたのが、此の圖書館なのである。私は、志士沖禎介氏の一面に、此の文化的志の濃かなるものゝあつたことに、更めて敬慕の思ひを深くし、又、

嚴父莊藏翁の貴き親心に對して、汲めども盡き難き恩愛を感じざるを得なかつたのである。

肉彈三勇士の一人作江伊之助氏の家は、平戸町の北端田助浦にある。氏が少年時在學した田助尋常高等小學校長磯本英一郎氏の御案内によつて、雨の日を其の生家に訪れ、御兩親にも面晤し、新たに設けられた佛壇の前に英靈を吊した。三勇士の中、作江、江下の兩氏か北松浦郡の人なることは豫て知つてゐたが、此の講習會の機會に於て、斯く親しく其の家に吊し得ようとは全く思ひかけぬことであつたのである。旅の所得はどこにあるか分らない。因に、田助浦は、今は寂しい磯町に過ぎないが、往時は平戸瀬戸から玄海灘に出づる樞要港として殷賑を極めた土地であり、又、明治維新當時には、人目を逃れ易き港町として、桂、木戸、高杉、大久保、西郷、大隈等の名士が密に參集して、國策を談じたことのある志士多々良孝平の家のあつたところである。

さて、この夏の本題に歸つて、北松浦郡教育會の主催にかゝる三日間の家庭教育講習會と、平戸町及平戸小學校保護者の主催による、同一問題の公開講演會とは、此の未知の地方に、斯問題に對する同憂の士多きことを、聽講諸君の熱心なる態度に知ることを得て、最も快心の至りとした。斯くて、前記の郡教育會幹部諸君の外、町長岩井敬太郎氏、平戸小學校保護者會長森下富太郎氏、其の他諸君の懇篤なる高誼を謝し。再び平戸瀬戸を渡つたのは四日の午後であつた。

長崎

佐世保から早岐で乗りかへた汽車が、トンネルと青い海のほとりとを過ぎて浦上の驛まで來ると、車窓には、なつかしい味の多い長崎の阪街の灯が、優しいまた、いきをしながら私を迎へて呉れた。私としても、何んとなく胸のどよめきを覺えた。そして、長崎驛のプラツトフォームには、縣保育會會長清水曉昇氏、同副會長田中得三氏、同顧問下川龍爾氏、同理事松尾利信氏、向井マユミ氏、伊藤ツル氏の笑顔があつたと共に、同じ縣保育會の講習の午後の部の講師として、いつの間

にか一足先きに着いてゐられた戸倉ハル氏のシックでスマートな洋装があつた。それから、直ぐ誘はれた夜宴の打ちとけたくつろぎと、去年と同じ旅館上野屋の三階の好ましくつろぎと、——長崎はなぜ、かう私をいつも嬉しく、くつろがせて呉れるところか。尙ほこゝに、前記諸氏の外、縣學務部長小山三郎氏、市學務課長道田間平氏、磨屋小學校長市川庄二郎氏、新町小學校長武富正次郎諸君の滞在中の高誼を深謝する。

五日から三日間の縣保育會主催の講習は、女子師範學校の講堂に開かれた。今年は幼稚園關係の諸君の他に、女子師範の卒業生講習に集つてゐた若い女教員諸君が多數加はられたので、昨年より一層盛であつた。又、私としても、昨年よりも實際的な問題に入らうとして、計畫を擴げて小學校低學年の實際へまで多く話し込んで行つた。今度のことは、或は偶然の好機會といふことであつたのかも知れないが、幼稚園の人と、小學校の人といつしよに幼兒教育の話を聴き、いつしよに考へて貰へることは、私の常に熱心に希望してゐることである。殊に、昨年の講習筆記が會の手によつて整理され謄寫されて居て、聽講者が必ずそれを豫め讀むことになつてゐた周到さと、講習中、問はんとする問題を記して提出せらるゝ人の多かつたこととは、私の不十分な講義を多少とも効果あらしめるに、どの位有効なことであつたらう。但、今年の講習會に於て、最も多くの満足供したものが、午後の土倉氏の遊戲實習であつたことは勿論である。

去年の私は、食るやうにして長崎を見物した。去年の「この夏」へ長々と書いた通りである。今年の私は、じつと長崎の裡に座つてゐて、去年の感興を味ひかへし、深めもし度いと思つた。などいふと少々きざ臭く聞えるかも知れないが、二日目の夕方から夜は、ひとり宿の藤椅子にゐて、木立の籠つた徳大寺あたりから、あの「日本の聖母」の像の立つてゐる大浦の天主堂の方へなびいてゐる、なだらかな丘の町の美しく暮れてゆく色を見たり、星のない雨もよいの空に、うるみを帯びて蒔き散らされてゐる阪街の灯に、なぜとも知らぬ淡い胸苦しさを感じさせられたり、秋の祭の稽古を市のあちこちでしてゐるのだといふ、太鼓ばやしの遠く近い音の合間に、しめつた夜氣の中を港の方から傳つて来る船の汽笛のや

るせない溜め息きに耳を寄せさせられたりしてゐた。

しかも、長崎の趣味内容の豊富と、舊知諸君の歡待プログラムとは、こんな勝手なフアンタヂヤ式獨居を許さない。その中でも、舊友武藤長藏氏の同行を得た稻佐のオランダ墓地は、昨年惜しくも訪ひ残したものゝ一つで、殊に深く心を惹いた。武藤君は長崎高等商業學校の教授で、長崎研究の最權威として世に周知せらるゝ篤學の士。舊識のよしみを以て、特に雨中、東道の勞を煩はし得たのであるが、私のやうな長崎一年生ともいへない程のものゝ見學にとつては、甚だ勿體ない譯なのである。説明せらるゝまゝに聽いてゐると、そこに靜かに横はつてゐる墓石の一つに、どれだけ詳しく、どれだけ廣い史論が引き出されるものか測り知り得ない。私は歸途の車の中で、武藤君と並び座してゐて、そつと一人で考へた。私などが平戸や長崎を味ふとか、感興をもつとかいふのは、猫が小判を嘗めてゐるやうなものだと。否、紙に包んだまゝの小判を前に、その包み紙に書いてある、味の説明を嗅いでゐるに過ぎないと。無知ほど憐れなものはない。

長崎の三日は、特別に早く過ぎた。その終りの日、夜十一時の汽車までの時間を、雨の丸山で過させやうといふ下川氏のいつも乍らの心つくしは、私の長崎情調學にとつて、まことに嬉しい趣向であつた。たゞ、天の方で、そうく安くは卸して呉れない心か、合憎と其日になつて、前日までの雨がやんだが、降つても晴れても、丸山の夜の灯は軒の簾に艶かしい。しかも、座には、去年も富貴樓で古い唄を聴かせて貰つた老妓愛八が、特に私のために呼んでゐるではないか。下川老の心づくしは、まことに極まるところを知らぬ心にくさである。私は丸山節を所望して見た。

親は他國に子は丸山に　櫻花かや散りくゝに

古い隆達小唄のわびしさ、が座に流れる。愛八はやがてまた三味線を取り上げた。

戀ひの唐船、錨をまけば　沖の鷗もしのび泣き

去年の「この夏」に、どうも變だなとは思ひながら、聞き覚えのまゝ、此の唄を間違つて記してゐた。上を「沖の黒船」

下を「すゝり泣き」と、飛んでもない大間違ひをしてゐた。間違ひも斯うなると、記憶力の問題ではなくて、情感性の缺陷を示すものである。愛八に其の通り白狀したら、「野暮なお方」と手きびしくやられた。私の野暮を當然承服すると共に、此の好ましい古い長崎小唄の名譽のため、特に再録して訂正して置く。

岡 山

八日夕岡山に着いて、九、十兩日、女子師範學校で講習した。吉備保育會主催である。岡山の幼稚園教育に就ては、更めていふまでもない程有名である。私としても、もう書くことがない程、いろ／＼の機會に於て多く語つてゐる。又、私として、静岡と共に、子どもの時からの個人的關係の密な土地であり、幼稚園に關しても、招かれ訪づることの最も多いところで、殆んど歳々に相見る人々は、皆、舊知中の舊知たる關係上、更まつた推賞の辭をいふべく、餘りに親し過ぎる間である。殊に國富吉備保育會長、片岡同副會長、その他幼稚園の諸君は素より、縣の齋藤視學、市の今西教育課長等當路の人々の、幼稚園教育に對する熱心が、益々強く、益々周密に、幼稚園の岡山をして、更に／＼充實せしめつゝある意氣込は、斯界のために欣快の至りといふべきである。よき幼稚園は他にも澤山ある。しかも、市として、又縣としての此教育に對する理解に於て、随一ならずとするも尤なるものである。アメリカの幼稚教育の進展が、セント・ルイスの視學ハリス氏と、その地の教育者諸君によつて貢獻せらるゝところ偉大であつたことは人の知るところ。後世我國の幼稚園發達史を編するものにとつて、岡山が、我國のセント・ルイス、それも澤山あらはれるであらう中の、少くも主要なる一つたらんことは、私にとつて楽しい聯想でなければならぬ。願はくは、折角の此貴重なる歴史と現在とを基として、斯教育のために益々自重、進展の實の擧がらんことを、親愛なる岡山に對して期待して已み得ないものである。

岡山から、私用を以て一旦東京に歸つた後、十六日より五日間の放送のため、再び大阪に赴いた。此の放送は、大阪中央放送局の計畫になる、約一ヶ月の兩親再教育講座の、序論的部分として委嘱せられたもので、兩親再教育の眞意義と家庭教育の中心問題につき、「親と語る」の題下にて、毎朝六時半から三十分づつ放送した。「親と語る」のであつて、親に語るのではない。そこに、私としてのいつもの心もちがある。曰く、親の苦勞。曰く、親の喜び。曰く、親らしき失敗。曰く、我子の理解者。曰く、親の祈り。皆親と共に親の心を語りあはんとしたのである。A・K管内を除きたる外、殆んど全國中繼であつたが、此の早朝の放送に耳を傾けて呉れる人が、數十萬の加入者中、假りに一人であらうとも感謝すべきである。しかも、之れに對して、各地の舊知未知の諸君から寄せられた、多數の懇篤なる書狀を讀んだ時、人の言葉の空に向つて消えてゆくものでないことを、今更の如く思つた。私は比較的屢々マイクロフォンの前に語るものであるが、常に此の心を以てしてゐるのである。

放送時間の後、十六日は足立勤氏に伴はれて、大和郡山在の阿禮祭に參列した。

稗田阿禮命ひたらあれは天武天皇の朝に仕へて、古事記を傳誦せられた人である。現代の言葉でいへば、古事記の口述著者である。

現在、奈良縣添上郡平和村稗田の賣田神社に祀つてある。僻村の小神社として、永く特に著聞さるゝところもなかつたが、奈良縣童話聯盟の人々が、巖谷、久留島、岸邊諸氏の熱心なる賛同の下に、之れをお咄の神さまとして祭ることとなり、昭和五年八月十六日、盛大なる第一回阿禮祭を舉行するに至つたのである。其の時は右三氏の他、安倍季雄氏や天野雉彦氏等も特に西下してその祭典に參加し、私も招待を受けたが差支へを以て行かず、今年初めて、第三回阿禮祭に列することが出来たのである。午前參拜、午後平和小學校に於て、奈良縣童話聯盟の京橋彦三郎氏、中村易一氏、崎山惣太郎氏、

仲川明氏、中井勘氏、森本葆氏及び神戸より特に参列された塚田喜太郎氏等と共に語り、記念講演をなしたる後、再び寶田神社の社前に於て、村の女子青年團員諸嬢の阿禮さま踊を見た。祭典にも講演會にも踊りにも、村總出の熱心である。しかも、どこまでも素朴、篤實、青田を越して一方に奈良の若草山を眺め、一方に畝傍山、天香山、耳無山の三山を望む、大和の國平和村の一日は、私として近來稀れにもつことの出來た楽しい一日であつた。此日恒例紀念として阿禮祭の三字をすかし、張りにした美しい奈良團扇が配られたが、求められるまゝに、それへ書きつけた一句。

語りつぎ言ひつぎ古し涼み臺

夜の盆踊も見て呉れといはれるのを辭して、大阪の長野校長に伴はれて堂ビルホテルに歸つたのは夜に入つてゐた。

十七日は宿約によつて須磨の母の會に赴いた。此の母の會は、前會長伊丹武司氏、次會長西村茂市郎氏その他幹事諸夫人の熱心によつて、最もよく整うてゐる會である。須磨は今大神戸市の一部となつてゐるが、さすがに閑雅、朗晴の勝地區で、會場たる西須磨小學校の如き、隅から隅まで知的明るさが行亘つてゐる。講演後、伊丹氏は其の編著するところの「須磨吏蹟」を惠與せられて、語ることに詳かである。すぐ大阪に歸る積りでゐたのを、そのお話に促し立てられ、伊丹氏及び會の後藤、安井兩氏、西光、堀兩夫人に伴はれて久し振りの須磨見物を試みた。一の谷で思ひ出したのが七月の文樂だ。

十八日は、T君に招かれて、箕尾の晝寢と、打ちくつろぎ、夜涼に入つて、寶塚へ連れられた。私は、此の現代人(?)にも似合はないお話だが、本場の寶塚劇場へ來たのは、實のところ、今日が初めてなのである。大阪へ來る度びに研究心(?)の動くことはあつたが、いつも其の時が無かつた。そして、今夜は大分得るところがあつた。レビューだけは東京でも見ることが出来るが、所謂大衆娛樂としての此の大仕掛けの原理と實際とは、來て見ないと分らない。お蔭でりこうになつた。

十九日は、O君にひつばられて、丁度來合せたNさんと共に堺の濱に遊んだ。此の土地の古い銘酒醸造家の若旦那であ

る。O君は、特に店から取り寄せて、私を酔はせようとかゝつた。その癖、自分は一滴もいかない君は、堅くるしい幼児教育論ばかり持ち出して、それで勝手に酔つてゐる。私を呼んで先生といふ人だが、理學士で文學士の此若旦那、野暮にかけては確に出藍の方だ。そこへゆくとNさんは熱心な遊戲の實際研究者だけあつて、私が得意に持ち出す、一夜づけの寶塚ダンス論に、然るべく調子をあはせて呉れて、ゆうべの唄うたひの名なども澤山教へて呉れた。O君もNさんも、私にとつて最も遠慮のない人達だ。私の心も身も此の有名な料亭、の大廣間以上に、ひろく風吹ぬける涼しさであつた。

近江八幡

二十日朝放送を終つて、すぐ滋賀縣八幡町へ行つた。滋賀縣保育會主催の三日間の講習が、午前十一時から始められるのである。

滋賀縣の保育界に接するのは初めてである。たえず通過してゐる地でありながら、今まで訪問の機會を逸してゐた。保育會長一谷軍治氏が、七月大阪へ來られて此の計畫のお話のあつた、私は、豫定の日程も變更して、その招きを喜び受けたのである。

此の講習中、涼しい雨の日がつづいた。そのため、琵琶湖周遊の船を用意して置いて下さつたのを楽しむことも出来なかつたし。近い安土城の遺跡に、史實は素より、舊友小山内薫君の名作「吉利支丹信長」の舞臺面などが、あり／＼と思ひ出されたが訪ふことも出来なかつた。其の代り、宿で名物の鮎料理や鮎ずしを賞味しつゝ、一谷氏から、所謂江州商人立志傳物語や、近江ミツシヨンとして有名なボリス氏のことなどに就て、豊富なお話をゆつくり聞くことが出来た。また夜は、學校から「藤樹先生全集」を借りて靜かに讀むことが出来た。

二十二日、講習を了り、私の切望によつて、一谷校長及び長濱聖徳幼稚園園長護雅亮氏と共に藤樹先生の遺蹟を訪ふた。

實に永年の宿願であり、「この夏」としては、愛媛縣以來の重要プログラムになつてゐたのである。大津から江若鐵道により、湖邊に沿ふて三井寺下、志賀、堅田、近江舞子等を経て一時間十五分餘り、安曇驛あづまで下車、そこから自働車五分程で、小川の里滋賀縣高島郡青柳村大字上小川に着くことが出来る。先づ藤樹神社に詣で、少し行くと、玉林寺があり、其の側に先生の墓塋があり、母堂と息子との墓が近く並び立つてゐる。其のあたりから、昔の小川村の地形が思はれる。藤樹書院趾は、そこから直ぐ近い。路に面して大きな藤の古木が、葉を繁らせて、昔のまゝにある。先生の邸宅と書院とは、明治十三年類焼の厄にかゝり、門と倉庫とが残つたのみであるが、後に假りに建てられた祠堂があり、こゝで年々儒式祭典が行はれることになつてゐる。又、先生の遺品を陳列してあるが、慈母孝養のため、官を棄てゝ大洲から歸られた當座、知行を離れた一村民として、生計の資を得るために酒盃を出された時の酒壺も其の内にあつた。屋敷路は二十間と二十一間の四角くで、舊い圖によつて、當時の建物の配置を知ることが出来るが、聖人の靜居を、まのあたり見ることの出来ないのは誠に遺憾の極みであるが、屋敷の四方を流れてゐる。細流は、貴い藤の木と共に昔のまゝの面影を偲おもはしめてゐる。祠堂を守る淵田竹次郎翁、特に先生の遺筆を取り出して示されたが、其の態度頗る慇懃。昔此の郷を訪へる一士人が、案内の農夫が、先生の墓塋に入るに當つて、特に潔服に更めて禮容厚きものあるに敬嘆したといふ、あの有名な傳へ話なども思ひ出される。

徳島

また大阪へ戻り、夜十時天保山棧橋發の汽船で、徳島に向ひ、翌、二十三日早曉小松島に着。富田小學校校長澤田兵三郎氏その他に迎へられ、徳島の旅館に入つた。

徳島縣保育會主催の講演が、此日から二日間、富田小學校の講堂に開かれ、一般家庭婦人を交へて、甚だ盛であつた。

徳島市は板東富根氏の私立幼稚園を先驅として、富田小學校始め各小學校に私立の幼稚園が設けらるゝに至り、それが數年前に於て一齊に公立に更められ、今日の六公立幼稚園となるに至つたのである。市小學校と市幼稚園とが、よく系統立てられてゐる點、岡山市に似るものがある。此他、二個の私立幼稚園の他、女子師範學校の幼稚園あり、更に男子師範學校の卒業生團體が幼稚園を經營せるは、斯界のため喜ぶべき新例となすべきである。前にも、松山の條にて記した通り、四國保育界のために、此の進展の勢にある徳島の幼稚園の充實を祈りてやむことが出来ない。幸に保育會長、市視學厚見萬司氏、女子師範學校附屬主事の堀米次氏、前師範國校長矢島喜源次氏其他澤田氏ほか各小學校長諸君の斯教育に對する熱心は、極めて有望なる將來を約束するものといふべきである。

さて閑談に入つて、徳島へ來たからには、阿波淨瑠璃を聴きたいものだが、人形芝居の源之丞一座は七月に忠臣藏を興行したが今日は居ないとのことで、何とも仕方がない。しかし、もう一つの希望の、人形作者天狗屋事吉岡久吉老を訪ふことは出來た。こんな名は芝居人形に興味を有しない人は知られないであらうが、此の道に於ける今では唯一の名人なのである。谷輪氏の「蓼喰ふ蟲」を讀んだ人は、あの人形芝居の好きな通人の老人が、徳島で此天狗久に會ふことを楽しんで居る條のあたりに、「ほんたうに腕の出來てゐる天狗久は、もう六十か七十になる爺さんで、もし此人が死んでしまへば、永久に此の技術は亡びるであらう……」と書いてゐるのによつたら覺えてゐられるかも知れないが、此の名人が即ち久吉老である。

その家は、徳島市在の國府町和田といふ處にある。私は、その仕事場の光景、老人の風貌、平淡でゐて味の深い談話などを、こゝに簡單に書いて仕舞ふのは惜しいやうな氣がする。又、こんなことは、誰れにでも興味のあるものではないかも知れない。そこで、案内役の澤田校長が時計を氣にしては見られた程、私が長く坐り込んだことゝ、その時注文して置いた由良之助の頭の、早く出來上つて届けられて來るのを待ちぬいてゐることだけを言つて、此の、もの好きの段を幕に

するとうしよう。それから、十郎兵衛屋敷跡を見、その墓に詣でたが、私の頭の中では、あの七月の文樂の南部の「鳴戸」が「この夏」としてこゝへ連絡して來るのである。しかし、之れ亦皆さんには、何の興味もない、それだけのせりふに過ぎないであらう。

歸途は、徳島驛から汽車で小松島へ出て、大阪への汽船に乗った。こゝまで澤田氏その他、及び小松島高等女學校校長關谷複吉氏と奥さんとの見送りを受けた。

靜岡

二十六日から三日間の靜岡縣教育會保育部研究會主催の講習は、一昨年の「この夏」の時と同じに、宿は與津、會場は靜岡の教育會館。その時の保育部長峰女子師範學校長が名古屋に轉ぜられて、新會長に同じく女子師範學校長山東善之進氏が代られたわけで、他は皆舊知の人ばかり、元來が配里のこともあり、私はもう旅の人ではない。しかも、元老の宇式かん氏相變らず雙樂であり、新會長の非常なる熱心の下に池田壽太氏、吉田やつへ氏、金原のぶ氏、鶴殿はな氏、林成子氏、松岡しづ氏、相田きく氏、太田民次郎氏、大山てい氏等理事として活躍、東海の斯の教育のために、大に人意を強うせしめるものがある、たゞ女子師範學校に附屬幼稚園のないことは、此の縣らしくもない缺陷である。前校長も此點に盡力して居られたが、再び新校長の新計畫となつてゐる。必ず實現を期したいものである。

與津の濱はいつ來てもいい。但、そう悠然として海を見てゐる暇も少なかつたが、一と朝、曉起してひとり清見寺の石段を登った。

山門に秋先づ涼し清見寺

見よ脚下の秋は澄めり清見渚

富士郡大宮

二十九日からの三日間、静岡縣富士郡教育會主催の兒童心理學講習。會場廣岡小學校。會員は甚だ多數であつたが、天は涼を惠んで、三日間、珍らしく汗のない夏期講習であつた。

きのふ午後。静岡から富士驛に着、會長渡邊榮作氏と幹事山田幸作氏とに迎へられて、すぐ大宮の宿に向つたが、先づ目を突いたのは、此春の大火の難に遭つた、痛々しい町の光景である。素より街道筋の商店は既に賑はしく復興してゐるが、富士表口らしい蒼然たる古味は見られない。宿は淺間神社の森に近く、焼失地域からも離れて居り、此の町の誇りとするところの清泉滾々として家を廻つて流れてゐる。

此の大宮から峠一つ越へた芝富村は、私の父が壯年血氣の頃、官選戸長として來り住み、大に土地開拓の志を試みた、私の家としては由緒の深いところである。少年時代、一度、父に伴はれて、銃獵旁々訪ねたことがあつたが、此の機會、大宮小學校青山於菟氏と教育會の山田氏の東道を得て、今も残つて居る屋敷跡を訪ひ、又當時の舊識の家の襖にある、父の筆になる四季の詩を書き取つて來たりしことは、私ひとり知る感慨の半日であつた。

有名な白絲の瀧も訪ふたが、恐らく私の今まで見た瀧の中で、最も優美なるものと言つてよからう。雄壯はないが名にふさはしき繊細美は、自然の最も巧緻なる傑作である。但し。それも亦、くに、自慢に近きものとして、多くいはぬ。更に一と朝、眼前一ぱいに展開した裾野の富士の壯大美に至つては、郷土の美として語るべく、餘りに偉大である。

と、ぐつと大きく見得を切つて、「この夏」の筆を、一と先づ措くことにする。一と先づといふのは、今夜立つてゆこうとしてゐる島根縣保育會總會が「この夏」のプログラムの大切な一つとして残つてゐるからである。(八月六日夕)

濱 田

大宮までの原稿を、読みかへす暇もなく編輯の方へ渡し、私はすぐ島根縣へ向つた。濱田で開かるゝ縣保育會總會と濱田町母の會總會とが待つてゐるからである。

汽車はきつちりと二十三時間。六日の夜濱田驛に迎へられた親しい顔は、豐田女子師範學校が前校長に代はられ津田主事が新らしくなつた他、井口町長、田邊婦人會長、濱田幼稚園の藤村たね子氏その他皆前々からのなじみである。一旦宿へ小憩してといはるゝのを辭して、すぐ車を新町の山形薫氏の家へ急がせた。今夜そこで開かれてゐる母の集りを訪ふためである。こゝで一寸説明の必要がある。一昨年九月、此地で同じ縣保育總會が開かれた時、私はその機會を以て、盛大な婦人會で家庭教育の講演をしたが、その話の中で、母の教養のためには、小人數の母の會が最も有益であることを語つた。ところが、それが、會長田邊德子女史その他幹部の夫人諸君と、參列してゐられた當時の女子師範學校小學校主事片寄卯三郎氏その他小學校方面の諸君とに、強い感銘を惹き起したのだそうである。私の講演後すぐその會場の廊下や控室で實行の相談が始まり。その十一日に早速出來たのが此の新町錦町母の會なのである。爾來、老會長の強大なる實行力と、藤村、山形兩副會長の熱意と、二つの小學校の先生方の理解ある協賛協力とによつて、次から次へと各町内の母の會が作り上げられて、本年春に至つて、濱田全町に行き亘つて、十二の會が出來上つたのである。それで、皆さんが私を生みの親だと言つてゐて下さるのであるが、決してそうではない。生むのはいつでもお母さん方なのである。

私の所謂「小人數の母の會」は、會員を二十人位、多くて三十人以下に限る。そして、規則正しく集つて、濱田町では隔月（一回）教育家を座長とする母の座談會を開くのである。即ち講話を聴くのでなく、母の實際の苦心を語り、具體の問韻を質するのである、今夜の會は、此の趣旨が誠にその通りに實現せられてゐた。私は會の平常をみださない爲に邪魔にな

らぬやう黙つて座つてゐたが。次々に母の口から語り出さるゝ親の言葉と、それを、學者としてではなく、自らも親心になり切つて應答してゆかるゝ先生方の言葉との裡に、私が、どんな感激に充たされたかは言ひあらはしやうがない。

翌八日。此の十二の小さい會の第一回聯合總會が、庭園の古く美しい公會堂に開かれた。午前總會、私の講演午後懇親會といふ終日のプログラムであるのに、五百に近いお母さん方が朝から集まられたには、私に第二の感激を與へずには置かなかつた。之れこそ、たゞの數ではない。それづくにみつちりした質を有する十二の母の會の總集なのである。更にその夜、有志夫人方數十人は私のために晚餐を共にして、母の會の將來、各自の問題につき相談をせられたが、初秋の夜は更くれども談盡くる時を知らず、私の來たために、少なくとも此全一日、家庭教育のために却つて家庭教育を、からにさせたのではないかと、心中すこぶる危惧恐縮にたえないものがあつた位である。呵々。

九、十兩日、女子師範學校に於て、島根縣保育會總會につゞき、講習會が開かれた。島根縣の幼稚園は、その數に於て未だ必ずしも盛なりとはいへない。しかも、年々、松江と濱田の兩地に交替に開かるゝ總會は會員諸君の熱心を示し、將來の發展を約束するもので、殊に之れで三回目の列席である私としては、特に多大の關心を山陰の保育界に寄するものである。

濱田には兩總會の他に、もう一つ總會があつた。それは保育會、婦人會、母の會の皆さんの、私に對する懇篤なる厚情の總會である。斯くて私は頭も、胃も、胸も一ぱいに充たしつゞけられて、十日午後、私の今年の「この夏」の終りである濱田を辭した。

往きがけには雲に曇つてゐた宍道湖が、明るい夕日に、あでやかな紅を染めて、たつたひとりで、うつとりと寝臺車の窓に倚つてゐる私を、もの言ひたげに迎へ、又見送つて呉れた。(九月十一日午後東海道特急車中にて)